

# GSデザイン会議発足記念シンポジウム レポート

日 時 | 2005年6月2日(木) 13:30-19:00  
場 所 | 東京大学弥生講堂一条ホール  
来場者数 | 315人

2005年6月2日東京大学弥生講堂にて、GSデザイン会議発足記念シンポジウム「『景観法』時代のデザインの方法」が開催された。

篠原会長による開会挨拶に続いて、独立行政法人水資源機構理事長（前国土交通省事務次官）・青山俊樹氏と、高知県知事・橋本大二郎氏から、景観法時代に向けたメッセージを頂いた。

青山氏からは、「まちの美しさは住む人の心の反映であり、風景の美しさの問題とは日本人の心の問題である」との思いが語られた。氏によれば、これまでの公共事業は日本人の本来持つ美しさを見落としており、景観法の施行は時代の要請であった。

橋本氏からは、景観法に呼応した高知県の取り組みが紹介されたのち、景観法時代における国と地方のあるべき関係性や、地域コミュニティの合意形成の重要性などについて自治体の首長たる実感のこもった意見が述べられた。GSデザイン会議に対して、プロの中で閉じることなく、市民をまきこみ、市民に対して積極的に働きかける運動体であって欲しいとの期待が語られた。

先導的プロジェクトの紹介では、行政の技術者からデザイナーや歴史家まで、幅広い立場の人間がひとつのプロジェクトにエネルギーを収束させていく、具体的な方法や考え方を紹介されていった（次頁参照）。

その中では、今後乗り越えるべき課題も数多く示されたが、そういった問題点を踏まえつつも、総じてプロジェクトに懸けた個々人の思いは熱く、今後のトータルデザイン実現に向けての可能性を感じさせる内容であったと思われる。

後半には、これから景観法時代を実際に担っていく若者たちからもメッセージが発せられた。

オープンディスカッションにおいても若者からの質問が目立ち、総じてこれからの風景デザイン分野に対する若者の関心の高さを感じさせた。

結果として、今回のシンポジウムは会場の収容人数を超える人々を集めることとなった。

特に、行政から大学・民間・学生までの幅広い層が集まっていた点や、関心を持つ若年層が多く参席していたという点において意義深いと言え、トータルデザインに向けたネットワーク形成の重要性を謳った当会議の趣旨にかなったシンポジウムであったと言える。



様々な分野から定員を超える315人の聴衆を集めた。



青山俊樹氏（独立行政法人水資源機構理事長）



橋本大二郎（高知県知事）



篠原会長による開会の挨拶。

## プログラム

- 13:30-13:40 開会の挨拶 | 篠原修（土木設計、東京大学教授）  
13:40-14:20 「景観法時代に向けてのメッセージ」  
13:40-14:00 青山俊樹（独立行政法人水資源機構理事長）  
14:00-14:20 橋本大二郎（高知県知事）  
14:30-17:30 「先導的プロジェクトモデル・シンポジウム」  
14:30-15:30 「苦田ダムとダム空間のグラウンドデザイン」  
パネリスト：篠原修（前出）／下村周（ダム計画）  
岡田一天（土木設計）／高楊裕幸（橋梁設計）  
15:30-16:30 「北彩都あさひかわ・駅と都市のトータルデザイン」  
パネリスト：加藤源（都市計画）／内藤廣（建築、東京大学）  
沖本亨（旭川市）／下田明宏（造園）  
16:30-17:30 「油津堀川運河の再生とコラボレーション・デザイン」  
パネリスト：藤村直樹（宮崎県）／佐々木政雄（都市計画）  
小野寺康（土木設計）／南雲勝志（プロダクト・デザイン）  
17:40-18:10 「若者からのメッセージ」  
パネリスト：西山健一（土木設計）／崎谷浩一郎（土木設計）  
大久保康路（建築）／土橋悟（土木設計）  
18:10-18:50 「オープンディスカッション」  
18:50-19:00 閉会の挨拶 | 加藤源（前出、日本都市総合研究所代表取締役）



左から 篠原修(土木設計、東京大学教授)、高楊裕幸(橋梁設計、大日本コンサルタント)、下村周(ダム計画、日特建設)、岡田一天(土木設計、プランニングネットワーク)



### 「苦田ダムとダム空間のグラウンドデザイン」

ダム堤体、水辺、道路、橋梁、管理棟等をその事業範囲に含み、数々の土木事業の中でもとりわけ総合的であるダム事業において、長期にわたりデザイン思想を一貫させ、「ダム空間のトータリティ」を獲得するための取り組みがそれぞれの立場で語られた。委員会やデザイン検討ワーキングといった「見守り続ける人」の体制づくりと具体的な取り組み内容、デザイン対象の体系化、基本方針を示す資料を毎回配布するなどといった「基本方針を意識し続ける工夫」などが紹介された。その一方でタイムマネジメントの困難さ等の巨大プロジェクトならではの課題も提示された。



左から 加藤源(都市計画、日本都市総合研究所)、沖本亨(旭川市都市建築部駅周辺計画課)、下田明宏(造園、(株)ディー・エム)、内藤廣(建築、東京大学教授)



### 「北彩都あさひかわ・駅と都市のトータルデザイン」

旭川のプロジェクトは「忠別川の自然を高架に貫入させ市街地に引きこむ」という大きなコンセプトのもとに、河川・都市・駅舎・民間までディレクションがなされている。河川空間はその本来持つ自然資源を都市に対する価値として捉え、シンプルな造形によりコンセプトを実現している。今後の課題として、駅空間を単なる交通施設とするSupplySideの発想から、まちや市民と共にあり方を考えるDemandSideへの発想の転換が重要とされた。事業制度のうえでは、大規模事業におけるコーディネーター制度の確立や、行政内の人事異動などが課題として挙げられた。



左から 佐々木政雄(都市計画、アトリエ74建築都市計画研究所)、藤村直樹(宮崎県土木部都市計画課)、南雲勝志(プロダクト・デザイン、ナゲモデザイン事務所)、小野寺康(土木設計、小野寺康都市設計事務所)



### 「油津堀川運河の再生とコラボレーション・デザイン」

油津の事業は運河計画の見直しから工事がストップしたことを契機に、運河整備に日南市街路事業や市民を巻き込んだ複合的事業として開始された。完全に工事途中の状態から改めて歴史的護岸の調査が始まり、現場からコンセプトを作りあげ設計にいたるプロセスや、地元の職人から行政までが現場で一体となって作り上げるという点に、ものづくりとしての油津の特徴がある。また一貫して強調されていたのは、藤村氏をはじめとする宮崎県の例を見ないほどに積極的な動きと、この事業に関わる人々の「人間的な」つながりの重要性であった。



### 「若者からのメッセージ」

左から 崎谷浩一郎(土木設計、イー・エー・ユー)、土橋悟(土木設計、日建設計シビル)、大久保康路(建築、日建設計)、西山健一(土木設計、イー・エー・ユー)



### 感想

今回のシンポジウムには景観法というキーワードが付いてはいたが、実際にはコラボレーションの具体的な三事例の紹介が並んだ。これはトータルデザインの実現に向けて、社会構造が変わることを待つのではなく「まず我々で実践する」という、GSデザイン会議の決意表明のようなシンポジウムであったと理解している。

気になった点としては、どの事例発表もプロジェクトの経過プロセスに力点を置いたものであったため、聴きに来ていた実践経験の無い学生や若者にとっては少々退屈な印象を与えたのではないかということだ。プロセスの検証はもちろん重要であるが、一方で、「デザインは出来上がったものがすべて」と言うこともできる。完成まで長期間必要という現実はあるにしても、今後は出来上がった事例がいかに世の中に受け入れられ、活用されているかを調査し、『トータルデザインの実効性』『デザインの力』をより強く伝えていく必要があるようと思われた。そのためには、単純に市民の意見・感想だけでなく様々な観点を盛り込んだ事後評価の方法論も検討していく必要があろう。

もう一点挙げるとすれば、地方で活動するまちづくりの関係者や行政のなかには、こういったコラボレーションの方法を「特殊で贅沢な遠い世界の話」と捉える人もいたようだ。そういう厳しい現実と戦っている人々に対して、GSデザイン会議としてどのような働きかけが出来るのか、考えていく必要があるようにも思われた。



### 「オープンディスカッション」

左から 司会:中井祐(土木設計、東京大学助教授)、篠原修、岡田一天、加藤源、内藤廣、藤村直樹、小野寺康

新堀大祐(ワークヴィジョンズ)  
吉谷崇(小野寺康都市設計事務所)